

140号  
ブラジルの歴史

ブラジルがポルトガル領になったのは、1500年である。日本は百年後の1602年に江戸幕府を開き、徳川300年の礎を作ったころだ。日本は、3代将軍家光の時代1639年に鎖国令を敷いたため、諸外国に大きく遅れをとってしまった。ブラジルを植民地としたポルトガル人は、奥地へと勢力を拡大し、現地人と混血、住民を増やし地域を拡大した。密林から、赤い樹液を出す木を発見、本国へ持ち帰り貴重な高価な染料として珍重がられた。この木をポルトガル人はPAU BRAJIL（ブラジルの木）と呼び、現在のブラジルの地名のルーツである。農園経営で、サトウキビに次いで、コーヒーの大農園経営の労働力が必要となり、アフリカ大陸の、黒人奴隸を多数連れてきた。黒人奴隸制度は、農園を支え、白人の主人を支え、大家族主義の、治外法権的社會であった。コーヒーなどの農産物を輸出することにより、国力をつけたブラジルがポルトガルから独立したのは1822年だ。1862年リンカーンの大統領により、奴隸制度は廃止された。日本では、1867年徳川慶喜が大政奉還し、やっと近代化へ向かって第一歩を踏み出した時期だ。ブラジルでは、ヨーロッパからの移住者が激増しご三家、イタリア、ドイツ、ポルトガルだ。農場主が奴隸制度廃止に伴い、労働力として連れてきた移住者が、刻苦精励して農園を手にいれ、自分たち独自の土地を持ち、家族を持ち、自作農として定着、家族を呼び寄せ親族が集い暮すようになった。**写真 ブラジルの独立**

## 141号 ブラジル木材の歴史－1

ブラジルを大きく分ければ、北部7州、東北部9州、中西部4州、南東部4州、南部3州から成り立っている。

南部3州では、移住者ご三家のうちイタリア人とドイツ人は、母国に近い気候を好み、イタリア人は気候温暖なパラナ州中心、さらに南のサンタカリーナ州はドイツ人、ポルトガル人は、気候を問題にせず、ブラジル全土に移住した。南ブラジルの代表的な木材は、パラナ州に多いパラナ松、サンタカリーナ州ではインブイア、マットグロッソ州ではイペが多く、北部パラ州などアマゾン地域全土に生息している。ブラジルでは「I P E TABACO」イペタバコ、略称現在の「I P E」イペである。強度、硬度とも優れており、纖維は通直素晴らしい木材だ。特にフローリングにすると光沢が素晴らしい、イペが建築に使用され始めた1970年代のはじめのブラジルは、驚異的な経済発展をしていた。ブラジル、特に南ブラジルの新設マンションは、殆ど幅300ミリ、厚さ30ミリのイペフローリングが使われ、金持ちたちのステータスとなった。以来高い知名度による根強い人気によって、ブラジルの住宅に数多く使用してきた。1995年頃、イペは中国人の好みに合い、爆発的な需要が発生した。5年遅れて日本の参入が始まった。日本はデッキ材としての輸入である。中国に遅れ、この時間的な格差は、いまでも影響している。中国の馬鹿でかい胃袋が、イペの価格を暴騰させ、現在は希少化し、大量入手は困難な、銘木級の木材だ。



## 141号 博多の歴史

### 黒田長政の菩提寺

黒田長政は筑前の国福岡藩の初代藩主である。父は豊臣秀吉の軍師黒田官兵衛だ。長政は幼少のころ織田家の入質として近江長浜城にて過ごした時期があった。天下分け目の関が原の合戦で、小早川秀秋の、寝返りを工作し東軍を勝利に導いた。この恩賞として、長政は筑前一国 55 万石を与えられ初代の福岡藩主となる。文字通り福岡藩の創立者だ。黒田長政の菩提寺は、元福岡城本丸表門として現存している崇福禪寺である。墓地には黒田家藩祖如水公、初代長政公を始め歴代の殿様の墓がある。そのほかには大老三奈木黒田家、家老久野家、博多三傑商の一人鳥井宗室、九州大学の学祖大森豊、明治の文化人、佐藤正純等の墓が並ぶ、まさに博多を起こした偉人永眠の地だ。初代藩主長政の墓が墓所中央に位置し、隣には中興の祖、黒田官兵衛如水の墓は、高さ約4メートル、幅約2メートル奥行約1.5メートルの巨大な墓石があたりを睥睨するよう屹立している。墓石の正面には、黒田家のことが、朱の漢文として刻まれている。朱文のなかに、織田信長や羽柴筑前の守秀吉などがあり福岡藩の城主となるまでの歴史が、刻まれ由緒あるところだ。



黒田官兵衛如水の墓石



秀吉が二度出てくる

## 142号

### ブラジル木材の歴史—2

前号で、南ブラジルの代表的な木材は、パラナ松、インブイア、ラパチョと紹介した。

パラナ松は、白色で軟らかく加工しやすいので、住宅の内装材に使われている。

ラパチョはウルグアイ、アルゼンチン名、イペはブラジル名である。

強度、硬度ともに優れている。

インブイアに代わって出てきたイタウバは、水に強く、材質もそっくりで第二のイペとして名を知られるようになった。

イタウバはドイツ系ブラジル人によって開発され母国のドイツ、フランスに輸出された2000年頃に、ブラジル材が初めて、「Wooden Deck」新たなアイテムとして認知され需要が発生した。

当初はイペ中心であったがその後クマール、ジャトバ、ガラッパ、マサランドウーバへと広がりつつあった。が2002年頃イタウバが新たに開発され需要が拡大した。

理由の一つは東南アジア製のセランガンバツー、ウリンと同じクスノキ科だ。

ヨーロッパ向けのブラジル材輸出の70%を占めているパラナ州には生息せず、マットグロッソ州にしか生息していないことがヨーロッパ人の「唯一無縁」を重んずるパーソナリティをくすぐり、好奇心を高め人気が急上昇したのである。

もう一つの理由は、当時インドネシアは政情が不安定、ノンシップメントなどの問題を抱えていたことが、インドネシア離れ。

ブラジル接近が掛算となってイタウバは、一躍ヨーロッパ向けの「Wooden Deck」の、寵児として、デッキ業界の脚光を浴び、注文が増大した。

ドイツ系ブラジル人は、イタウバの開発により順調に伸びてきたが、2005年のIBAMA（環境省）の介入により、一端修正を余儀なくされ、業界の再編成が行われたが、もともと勤勉で辛抱強いドイツ系ブラジル人のこと、まじめに努力し現状を回復、現在に至っている。



## 142号 博多大宰府天満宮

大宰府天満宮とは、学問の神様といわれる菅原道真公（菅公）の、御墓所に社殿を造つたものである。菅原家の先祖は、天穗日命の14世野見宿禰の子孫で土師氏と称していたが恒武天皇の頃より菅原氏をなのる。菅公は、承知12年（845）京都で御生誕、幼名を吉祥丸といわれ、幼少の頃より学問を好み詩歌にも優れていた。33歳で文章博士、42歳で讃岐守として、地方生活し、名国司として領民に慕われた。やがて、人柄が宇多天皇に認められ藏人頭から、右大臣に登用されたのち、昌泰4年（901年）には従二位を授かったが、讒言により、大宰府に左遷された。京都を離れるに当たり、紅梅殿の梅の前で有名な、「東風吹かば 匂いおこせよ梅の花 あるじなしとて 春な忘れぞ」と詠まれて、大宰府へ旅たった。このときの、梅が、主を慕って、大宰府のご本殿まで、飛んできた、この梅が「飛梅」であると伝えられている。現在のご本殿を守るがごとく、春になるとほかの梅に先駆け菅公を慕って咲くと伝えられている。

大宰府に移られてからの菅公は、政務無くひたすら謹慎のご生活を送られた。恩賜の衣を捧げて「去年の今夜清涼に侍す 秋思の詩篇一人断腸 恩賜御衣今此にあり 奉持して毎日余香を拝す」と、ひたすら国家の繁栄と皇室の安泰を祈った。無実の晴れることを願つておられたが、延喜3年（903年）再び京の日を踏むことなく、御歳59歳で亡くなられた。

大宰府天満宮案内書参照

### 143号 ブラジル木材の歴史—3

次にブラジルデッキ材の代表的な三種類の材について紹介する。

1. イペ 南米材ではかって、日本への輸入量は一番おおく、かつ知名度は高い、材質、硬度などあらゆる面で優れており、デッキの中ではどこから見ても王様だ、しかし中国の買いが依然として衰えず材が極端に少ないと、価格が急騰したことなどから高値固定、しかも安定供給が望めず銘木クラスに位置

する材だ。中国の馬鹿げた胃袋がいっぱいになり需要が衰えるのは、2010年の万国博まで期待できない。

2. マサランドウーバ もともとアマゾンのジャングルの中に生息している大木だ。ゴムの木のように、樹幹を傷つけ、樹液を採取し、薬剤としての使用することだけが目的の樹木であり、製材されて使用されることなどは考慮されていなかった樹木だ。それがいきなり、ジャングルで伐採され、樹から木に変わったのである。木としての役割などわからぬままに伐採され、シャバに引っ張り出されたマサランドウーバは、太陽にあたると縦方向纖維に沿って割れるというか、ビシビシと大きな悲鳴をあげて裂ける。理由は、樹の内部の含水率が高く、表面を直射日光であぶられると、表面が乾いて引っ張られて大きく裂ける。これはマサランドウーバに限らず、どんな木でも同じ現象は起きるのが木の持つ特性であるが、マサランドウーバは極端に割れる木だ。それだけにこの木の乾燥が特に難しいとされ、特殊な技術が必要だ。天然乾燥すなわちADはもちろんダメ、人工乾燥も特殊な技術が必要、高温蒸気と生蒸気を交互に送り込み、さらに生蒸気を追い出す作業を、何度も繰り返すことにより、やっと20%以下になるという厄介な代物だ。比重が高く1m3、1200kg～1300kgあり、硬度も高く現場での施工も大変な材だ。

3. イタウバは、第二イペとして、ヨーロッパで脚光を浴びていることはすでに述べたとおりである。特性としては、イペの欠点は、材によってだが時には、残念ながら棘が出る材がある。イタウバには、これがないので素足OKだ、手すりもOKだ。イペよりも、樹脂分が強く、橋など水分の多いところの使い勝手がよろしいことだ。加工も容易曲がり強度にも強いなどの特性を有している。もっとわかりやすく言えば、イペ、ウリン、セランガンバツー、を足して三で割ったような材がイタウバである。 続く

### 143号松戸市戸定邸と歴史館

千葉県松戸市から西へ6号線を横切ると小高い丘を戸定が丘という。戸定の地名は古く起源は中世と伝えられている。徳川家最後の将軍徳川慶喜の弟であり、水戸徳川家最後の11代藩主、徳川昭武が、この戸定が丘の屋敷を作ったのは、1884年である。これが現在のだ。隣接地にある戸定歴史館は、兄徳川慶喜や、昭武の遺品など徳川家ゆかりの品々が収蔵されている。徳川昭武没後、徳川武定の時代に松戸徳川家となり、戸定邸を本邸とした。1951年松戸市に寄贈、1968年千葉県指定名所、2006年戸定邸はじめ一帯の建物が、国の重要文化財に指定された。木造平屋一部二階建ての建物は明治前期の上流住宅として貴重な存在だ。座敷から西側眼下には江戸川が流れ、晴天には富士山を眺望出来る素晴らしい屋敷だ。この一帯は2.3ヘクタールの公園で四季折々の自然を楽しむことが出来る。

ここは、徳川家ゆかりの地、明治前期の重要文化財、木造住宅の戸定邸、緑豊か起伏に富む明治前期の庭園、富士を素晴らしい眺望がある。木材やなら一度はいって見る価値のあるところだ。とって置き、のお勧めです。 資料参照 松戸市歴史観より

わが庵（いほ）は 松原つづき海近く 富士の高峰を 軒端（のきば）にぞみる

#### 144号 ブラジルの木材の歴史—4

IBAMAやSEMAの強力な管理下で、アマゾンの木材業界は今後どのようになるか？中小業者を排除した大手の独占で、カルテルを組んだ談合業界になるのか？そうなる可能性は低いはずだ。もともと、一匹狼的な業者が多く、業界全体で結束し、協同で輸出市場などに対応することなどは、この国の国民性からして考えられないことだ。距離的にも離れていること、とり扱う木材の種類の違うこと、更に品質にたいする考え方方が異なり、日本の協同組合的な組織を作るのは夢物語だ。アメリカ、カナダの業者が組合を作つて日本の・ショウに出展するようなことにはならない。となれば、独自に、個別に日本の木材業者に対して丁寧な売り込みをかけることになる。この場合まず、IBAMA、SEIMAの、厳格な管理をパスしなければならない、それには、しっかりした業者であることが前提となり、法順守の精神でなければならない。持続可能な、森林認証材としてしっかりした木材を出荷せねばならない。このように、ブラジル現地の木材業者がいわゆる襟をただして商いすることにより、信頼され、これから商いが永遠に継続することになる。いまや、裏付けの無い業者は相手にされない時代に入った。 続く



144号 青森-1

### 十和田湖

青森県と秋田県にまたがる十和田湖は東湖、西湖、中湖がある。約3万年前の、十和田火山大噴火によって、陥没から出来たのが東湖、西湖さらに、約一万年前の再噴火により出来たのが中湖だ。これにより同じ湖で、位置により、三つの呼び名があり、これが三湖伝説の所以である。また、カルデラが二つあり、第一カルデラと第二カルデラで二重カルデラ湖として珍しい湖だ。冬でも凍らず、のは、奥入瀬川は十和田湖を経由して流出入し、安定した水位を保っている。また、一番深いところは327メートルで、日本では三番目に深い湖だ。観光船に乗船して、湖を一周した。気候の変化が激しく、東部の子ノ口から乗船した東湖では、湖面はどす黒い上に、猛烈な強風でどうなるかと心配したが、御蔵山を擁する半島を過ぎて中湖に入ると、お日様が顔をだし、先ほどの風はどこへやら、ピタットおさまって、絶好の航海日和となった。南側には鉄分を帶びた赤い崖が迫り湖面に影を映す。中山半島付近には、松の緑が美しい小島が散在、エメラルド色の湖面と、自然の素晴らしいハーモニーだ。正に絶景かなである。仙台の松島にも負けない美しさだ。やがて、有名な詩人であり、彫刻家の高村光太郎最後の作品といわれ、十和田湖のシンボルでもある、有名な乙女の像のある船着場に到着した。素晴らしい大自然の営みを満喫した航海であった。

## 叙勲のご挨拶

私は、はからずも、日集協 日本集成材工業組合の推薦により、旭日小綬賞の栄に浴しました。身に余る光榮に感激いたしております。これも一重に、皆様方の多年にわたるご指導とご支援の賜物と、深く感謝いたしております。今後、この栄誉に恥じることなきよう一層精進いたす所存で御座います。相変りませず、ご指導ご鞭撻のほどを、御願い申し上げます。尚、発令早々 ご祝意などを賜りまして厚く御礼申し上げます。まずは、略儀ながら御礼申し上げます。